

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	金 奎 道
2. 審査委員	主 査：（鳴門教育大学教授）西 園 芳 信 副主査：（上越教育大学教授）西 村 俊 夫 委 員：（兵庫教育大学教授）福 本 謹 一 委 員：（鳴門教育大学教授）長 島 真 人 委 員：（鳴門教育大学教授）頃 安 利 秀
3. 論文題目	音楽科教育において異文化芸術を経験することの意義と指導方法に関する実践的研究
4. 審査結果の要旨	<p>論文提出による学位申請者 金奎道 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。</p> <p>論文審査日時：平成26年2月15日（土）10時00～12時00分 場所：兵庫教育大学 大阪サテライト（402号室）</p> <p>(1) 学位論文の構成と概要</p> <p>（構成）</p> <p>序論 本研究の目的と方法 第1章 異文化芸術の経験に関する基礎理論 第2章 異文化芸術の学習の諸相 第3章 異文化芸術としてのカンカンソーレ 第4章 文化的側面の提示と生徒の受容からみる異文化芸術の経験 第5章 音楽科授業において生ずるズレにみる異文化芸術の学習 第6章 自文化を立脚点とする異文化芸術の学習 結論 総合的な考察と今後の課題</p> <p>（概要）</p> <p>本研究は、J. デューイの芸術論をはじめ、異文化理解に関する基礎理論を基に、異文化芸術を経験することの意義と指導方法の理論的枠組みを導き出し、その視点から自ら実践した音楽科授業を分析するという実践的検討によって、これからの学校音楽教育の改善につながる授業構成理論を提案することを目的としたものである。</p>

まず、理論的研究として、カルチャー・ショック論にみる異文化体験による情動的反応と歴史的文献にみる西洋人が聴いたアジアの音楽に対する感じ方、聴き方の様相をまとめた。そして、J. デューイの芸術論から、異文化芸術を通して人間関係や社会関与の仕方を知るためには、その背景となる社会的・文化的・自然的・歴史的要因といった文化的側面をかかわらせることが有効になると導いた。そこから、音楽科授業における直観的・共感的な方法として、パフォーマンスを通じた学習方法を採用することとした。本研究における異文化芸術の学習の教材としては、韓国の民俗芸能カンカンソーレを取り上げた。その理由は、カンカンソーレは文化財としての価値が認められていること、さらに、韓国の昔の生活様式及び風土を知ることと適していると考えられるからである。

次に、実践的研究として、中学生を対象に教師による文化的側面の提示の仕方とそれをどう受容したのかについて生徒の反応を分析した。その結果、異文化を体験するパフォーマンスの意味付けには音楽の背景となる人間の生活様式や生活感情と結び付けて提示することが重要であることがわかった。そして、異文化芸術は、生徒のもつ音楽的語法との不一致度が高いため、教師と教材と生徒の間にズレが生ずることが見られた。そのズレには、①〈曲想・イメージと演奏の表現内容とのズレ〉②〈表現（歌い方）と音楽の法則性とのズレ〉③〈言語と音楽との相関性のズレ〉があるとした。さらに、自文化を立脚点とする異文化芸術の学習を構想し、異文化の学習のレディネスとして自文化の学習を位置づけ、相互の音楽文化を関連付けた授業構成を展開していくことが、生徒の音楽的成長を高める上で有効であることを明らかにした。

以上の結果から、学校教育において異文化芸術を学習することは、他にも存在する多様な芸術の根底にある態度を知ることができ、様々な音楽の普遍性と特殊性への理解につながると結論づけた。とりわけ、異文化芸術の経験は生徒の音楽観を拡大するとともに、芸術経験が広まりかつ深まることが確かめられた。

(2) 審査過程

- ・論文の意義や独創性（学校教育の実践への貢献あるいは社会的貢献を含めて）

本研究は、音楽科教育において異文化芸術を経験することの意義と指導方法について、韓国の民俗芸能を教材とする授業実践を通して論究したものである。異文化芸術を学習することを通して、異なる文化の理解を深めるとともに、自国の文化を見直し、尊重する態度を育てていくことは、現代の音楽教育に求められている大きな課題の一つであり、本論文はその解決に資する内容である。

本研究の独創性は、異文化の経験に関する理論的考察に基づき、その視点から氏自ら実践した音楽科授業の有効性を学校現場において検証した点にある。とくに、文化的側面の提示と生徒の受容、教師と教材と生徒の間に起こる認識のズレに着目した授業分析を通して、異文化芸術の経験の意義と指導方法を実証した研究はこれまでなく、教育実践学的な立場から高く評価できると判断された。

以上のことから、本研究は、今後の学校教育への実践指導に直接的に貢献する内容であり、国際社会に適応できる人材の育成に寄与できるものと判断し、審査委員はこの点を高く評価した。

・論文の発展性（今後の研究課題）

現代を生きる子どもにとっては、民謡や郷土芸能などの伝統文化は、既存の音楽的語法とは異なり、子どもの生活とは遊離していることが現状である。もはや伝統音楽自体が子どもにとって異文化化しているといえよう。本研究において得られた知見は、異文化芸術の学習のみならず、自国の伝統音楽の学習にも応用できる部分が多大であると考え。氏の今後の研究が期待される。

(3) 審査結果

以上により、本審査委員会は金奎道氏の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。